

## 「寿都町の将来に向けた勉強会」（第16回勉強会）開催概要

1. 日 時 2023年6月5日（月）18:30~20:17
2. 場 所 寿都町総合文化センターウィズコム2F会議室
3. 出席者 【勉強会メンバー】：8名  
【ファシリテーター】：北海道大学 竹田先生
4. タイムライン  
18:30~18:33 本日の進め方  
18:33~18:55 これまでのまちづくり議論のまとめ  
18:55~20:15 文献調査の進捗状況報告  
20:15~20:17 次回以降の進め方ほか

### 5. 主な内容

#### （1）本日の進め方

- ・まず、これまでのまちづくり議論のまとめを行っていききたい。その後、NUMOから文献調査の進捗状況を説明したうえ、質疑応答を行う。

#### （2）まちづくり議論のまとめ

- ・竹田先生より、これまでのまちづくり議論の整理、目的の認識再共有を実施（別紙）

#### <主な質問>

Q1：時間をかけてまちづくり議論を行ってきたが、本勉強会の行先、ゴールが分からない。このまま議論を続けてその先に何かあるのか。

A1：議論のアウトプットをどう扱うかは重要なテーマの1つ。今後、アウトプットの在り方、扱いなどについても話し合っていきたい。

Q2：役場にはまちづくり議論の経過は伝わっているのか。

A2：勉強会の開催の都度、その経過を関係部署で共有している。

Q3：本勉強会だけで議論しても無力感がある。例えば対話の場との連携など、具体的な成果につながるような活動に踏み込んでいくべきではないか。

A3：対話の場でもちょうどまちづくり議論をしているところ。会員からは「町内には色々な職業の方がいるので、それぞれの得意分野で力を発揮し、アイデアや意見をいただいているのか」といった意見が出ている。それが勉強会と直結するかは分からないが、対話の場と何らかの関わりが生じる可能性はあると思う。

Q4：対話の場でもまちづくり議論をしているとのことだが、傍聴ができず内容も公表されていないから、どんなことを話し合っているのか分からない。

A4：対話の場の公開のあり方については、会則や会員の意向に基づき一定のルールのもとで実施しているもの。議論の内容は「対話の場通信」を役場広報誌に折り込んでお知らせしているほか、発言者が分からないよう加工したうえで寿都CATVで放映したり、NUMOのホームページでも内容を公開している。我々の発信不足かもしれないが、情報をクローズにしているわけではないのでご理解いただきたい。

⇒勉強会時間中、メンバーから「NUMOのホームページを確認したところ、対話の場や勉強

会の内容が整理され、発信されていることが良く分かった。NUMO はこれらの内容が発信されていることについてもっと周知すべき」との意見あり。

### (3) 文献調査の進捗状況報告

・ NUMO より文献調査の進捗状況を説明

(資料は第 16 回寿都町「対話の場」で使用した資料と同じもの)

#### <主な質問>

##### (断層に関するもの)

Q 1 : 東西南北、寿都は断層に囲まれていると感じた。このような地域で調査ステップを進めるべきか疑問。

A 1 : 全国的に見ればもっと多くの断層が存在する地域もある。

Q 2 : 黒松内低地断層帯について、地震調査委員会では断層帯全体で評価しているのに対し、NUMO は白炭西・東断層の単体で評価しているのはなぜか。尻別川断層について、原子力規制委員会や北海道電力は「活断層だ」と評価しているが、NUMO は活断層と評価していないのはなぜか。

A 2 : 地震調査委員会などでは地震の観点から評価しているのに対して、今回の文献調査は、断層が処分場を直撃するか否かの観点の評価であること、段階的調査のうちの初期の評価であることから、そのような違いが生じている。

Q 3 : 尻別川断層について、北海道電力は寿都町内の地下まで伸びていると推定している。推定であっても可能性があるなら NUMO はその部分を適地から除外すべきではないのか。

A 3 : 基準地震動を設定するための断層モデルの話だと思う。今回の文献調査では、処分場を直撃するか否かの観点から、技術WG で審議された基準に従い、断層面があるかないかの観点で確認している。

Q 4 : 厚真町では震源から 20 km 離れていても地震が起きている (胆振東部地震)。NUMO は考慮する必要がある古い活断層の定義として「地表の延長がおおむね 10 km 以上」としているが、それでは短いのではないか。

A 4 : 「10 km」は断層からの距離ではなく、断層自体がどのくらい連続しているか、その距離を指している。

##### (火山活動に関するもの)

Q 1 : 「寿都町内には 800~1,000 万年前の海底火山の残滓があるのでは」と指摘する専門家もいる。鉾山など、町内には疑わしいものが沢山あるのではないか。

A 1 : 鉾山は過去のマグマの活動と関係があるが、それが現在の火山活動と直接つながるわけではない。

Q 2 : 寿都の南方で低周波地震が観測されており、それが「地殻流体」や「部分熔融域」に起因するものなら、それらはマグマの存在を指すのではないのか。

A 2 : 必ずしもマグマそのものを指すわけではなく、流体的なものが存在する可能性がある、というもの。

Q 3 : 技術WG では「火山フロントの西側 (寿都町もそれに入る) では火山は発生しないとは言

い切れない」との意見あり。低周波地震の観測は、まさにそれを指す（寿都に火山の存在の可能性）のではないのか。

A 3 : 太平洋側では今後 10 万年の間に火山の発生はないということは言える一方、日本海側は火山の発生可能性に濃淡がある、場所によって違うから詳しく調査する必要がある、ということ。寿都町が「濃」に当たるとは必ずしも言えない。「濃」としては、例えば、活動域が移動しているような火山において今後移動していくような場所があたるのではないか。

Q 4 : 「寿都海底山脈」という名称を聞いた気がするのだが、寿都湾の中（海域）の火山や地層の文献は残っていなかったのか。

A 4 : (寿都湾に限らず) 北海道南西部の広い範囲に、さきほど「800~1,000 万年前の海底火山」と発言があった過去の海底火山由来の岩盤が分布していることを文献・データで確認している。

#### (調査の進め方に関するもの)

Q 1 : 文献調査で分かった心配事、その心配事を次のステップ（概要調査）で小さくしていく、ということなのではないかと思う。文献調査の段階では事実と可能性（懸念があること）が混在しているので、個人的には文献調査と概要調査を一体的に考えるべきと思う。

A 1 : 通常の地質調査であればご指摘のような進め方をするのが一般的。ただ地層処分事業は最終処分法で調査ステップが定められており、軽々に次のステップの概要調査へ、ということとは言えない。

Q 2 : 疑わしいデータは「留意すべき」で止まっている。結局、次の調査ステップに進みたい、どこでも掘りたい、分からなかったら概要調査に進みましょう、というふうに聞こえてしまう。

A 2 : 確実にダメな部分を除外するという考え方に基づいたもの。確実にダメな部分のみを示すだけでなく、次の段階の調査で「留意すべき」点を示している。

Q 3 : 資料 P 3 の「3. 地熱活動」「4. 火山性熱水や深部流体の移動・流入」は文献調査段階では評価しないことになったのか。

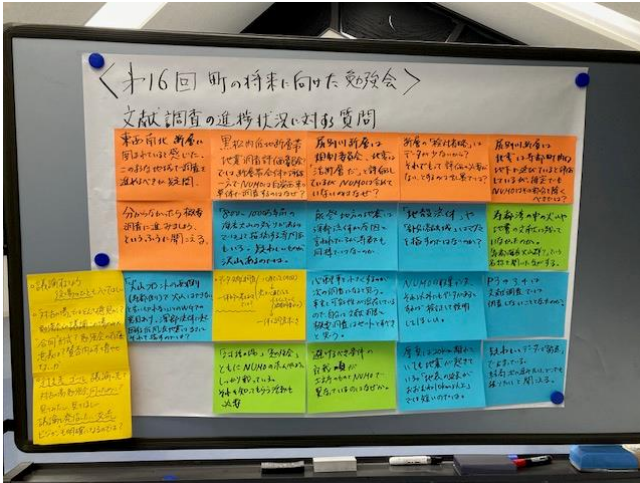
A 3 : その他の評価のうち、地質環境特性の検討（P 3 の下の方）において検討している。P 1 4 では最終的な留意事項を示しているが、その過程で、地温や地下水の pH（酸性度）のデータを評価している。

#### (4) 次回の日程について

次回は 7/20（木）の開催としたい。→メンバー了承

以 上

【写真】意見交換の様子



# 「寿都町の将来に向けた勉強会」まちづくり議論のまとめ

